

普段は穏やかな海が、黒い津波になって、人も家も、何もかものみ込んだあの日から10年がたつ。今、沿岸部を歩くと、信じられないほどきれいに整備されている。盛り土の上には新築の住宅が立ち並び、震災遺構として残された場所では、見学者が順路に従って説明

核心評論

は死者の数が多すぎて火葬が間に合わず、一時的に2108人の遺体が宮城県で「仮埋葬」と称して土中に埋められた。これだけの規模の土葬は東京大空襲以来だった。しかし、多くの遺族の要望を受け、2011年11月までに「改葬」として、全て掘り起こされ火葬

板に見入っている。震災直後のグシャグシャにつぶれた車や、民宿の屋上に残された観光船、腐った魚のにおいを記憶していないと、あの光景を想像するのは難しい。

忘れずにおきたいことが二つある。一つは土葬である。津波に襲われた地域で

に付された。

葬儀社「清月記」の西村恒吉さん(47)は、仮埋葬と改葬作業にリーダーとして携わった。土中に埋葬された遺体は、ひつぎの中でビニール製の納体袋にくるまれている。掘り起こしの際、ひつぎを重機で釣り上げる時、血液と脂と雨水が混じ

記憶を将来の教訓に

った、オレンジ色の液体があふれ出してくる。新しいひつぎに納め直し、火葬場で遺族と対面する際には、遺体の口や鼻から出る液体を拭い、綿を詰めることもあった。「くさいとか気持ち悪いとか、嫌だな、という感情を表に出すことは私どもには許されません。それが葬儀社で働く者の自負です」。津波対策と火葬の広域連携を進めて、二度と土葬をしなくて済むようになってほしいというのが、西村さんの願いだ。

忘れてはいけないもう一つは、東京電力福島第1原発事故を受けて、県内外に避難した子どもたちのことである。

避難指示などの対象となつた周辺12市町村には、事故前に8388人の小中学

生がいた。震災直後の11年5月には1421人に減り、さらに昨年4月には960人にまで減った。事故前の11%しかないことになる。

事故当時、単身赴任で福島市立小学校長をしていた林弘美さん(59)は、自宅が福島第1原発から9・7キロの富岡町内にあったため、避難所に身を寄せた母親と、いわき市の高校に泊まり込んだ娘を迎えに行き、アパートの間で暮らしながら仕事を続けた。

現在いわき市立御厩小学校長の林さんが気になってるのは、放射線学習の在り方だ。事故後、放射線がエックス線検査などに活用されていることや、食物検査で安全・安心を確認していることなども教えてきた

が、こうした学習が福島県以外へ広がらないことに不安を感じる。

「必要性を感じないこと、指導者のスキルがないことが原因だと思います。児童が大人になり、福島県出身ということ、万一偏見を持たれても、強い心を持ち、震災や原発事故についての正しい知識を説明できるように育てよう」と、職場で話し合っています。

10年を経て、あったのに忘れられていること、今もあるのに見えなくなっていることが他にもたくさんある。それらを何度でも掘り起こし将来の教訓にしておく。国や自治体だけでなく、私たち報道の責務でもあ

る。
(共同通信社仙台支社長 石亀昌郎)